



現在未曾有の国難とでもいうべき、新型コロナ感染が世界中に広がり、「stay home」が key word になっています。日本中がストレスのたまる状態に喘いでおりますが、一致団結してこの国難に打ち勝とうではありませんか。日本の長い歴史を振り返ってみますと、コロナ禍直前の世の中が非常に稀な状態であったと思います。私が生まれた昭和 30 年代は、もはや戦後ではないと言われ、経済が非常に勢いで拡大し始めた時代でしたが、ほとんどの日本人が家庭で食事をし、外食は年に数回の特別なハレの日だけのものでした。デパートも 18 時には閉まっていたし、毎週 1 日は休みがありました。夜は一部の店だけが開けているような時代でした。コロナ禍の非常事態宣言後の景色とそんなに大きく異なるものではなかったように思います。マスクが少し騒ぎすぎではないでしょうか。年に数回ハワイだ、西海岸だ、ヨーロッパだと、海外旅行に行くのが当たり前になっていますが、当時は海外に行くのは家族総出で見送りをして、命がけで取り組む一生に一度の冒険のようなものでした。

ワクチン接種が始まり、当初は先進国で最も遅れていると、批判の嵐でしたが、大規模接種や地方自治体の準備が整うと、一転猛スピードで接種が実施されています。きわめて日本らしい状況です。準備が整うまでに時間がかかり、特に IT 化が遅れているために批判の嵐にさらされましたが、軌道に乗ると驚くほどのスピードで達成する術は世界一なのでしょう。

今回のワクチンは、ハンガリー出身の女性科学者カリコー・カタリン博士が生み出したものです。画期的な m-RNA ワクチンが迅速なワクチン開発に結びついたのです。しかし m-RNA ワクチンの開発は、その意味を理解してもらうまでに数えきれないほどの失敗と不運に見舞われて長い歳月を要したようです。カリコー博士は、ベルリンの壁崩壊前にハンガリーから米国へ渡ったのですが、彼女の研究の重要性を理解する者はほとんど皆無であったようです。研究費を獲得するために血のにじむ努力をされたそうです。最終的にウグル・シャヒン博士とオズレム・トゥレジ博士のトルコ人ご夫婦が設立されたドイツの製薬会社ビオンテック社で、カリコー博士が副社長として参画されて生み出されたものです。

2018 年から PCN の表紙を飾っているのも、それまでほとんど関心を持ってもらえなかったアール・ブリュットの作品群です。PCN の評価が高まったのは、もちろん掲載論文の質の向上によるのはいまでもないので、表紙を飾る素晴らしい作品群も寄与しているのではないのでしょうか。知られざるものを発掘するのも精神科医の貴重な役割なのでしょう。

木下利彦